

2014年(平成26年)1月5日 No.651

新年祝賀式 社長挨拶要旨

2014年1月6日 竹下社長

皆さん、明けましておめでとうございます。皆さんには9日間の休暇を有意義に過ごされ、ご家族と共に穏やかなお正月を過ごされたことと思います。2014年もマルカキカイグループ各社と全世界の役職員にとり、明るく希望に満ちた年であることを心より願う次第です。

昨年の年頭で、干支の「癸巳(みづのと・み)」は筋道を立てて物事を考えて処理していけば、これまで眠っていた新たな動きが頭をもたげ、新たな方向に向けて進み始める端緒になる年と話しました。マルカキカイグループでは世界4極体制を始動させ、いくつかの新たなプロジェクトに意欲的に取り組んだ結果、事業拡大への胎動を感じることができた1年でした。

今年の干支は「甲午(きのえ・うま)」です。「甲」は「草木の芽が殻破って頭を出した象形文字」であり「旧体制が破れて革新が始まる」という意味です。又「10年を単位とする始まりの年」をも表わします。「午」は陰陽の陽の極致であり、太陽が最も高く上がった状態を示すのが「正午」です。「甲午」の年は、人間の本性があからさまに発揮される年だそうで、従来の踏襲を望む者、新しい枠づくりを企てる者、その他様々な行動が受け入れられる年と言われています。前回の「甲午」の年は1954年(昭和29年)で、日本の高度経済成長が始まった年でした。個人の才覚次第で高度成長の波に乗れるか否かが決定し、事業の盛衰が大きく左右された時代でした。今年も同じような「うねり」が新たに起こる予感がします。甲午の年は一つの時代に区切りが付き、新しい時代の幕開けの年と言えます。

今年はスポーツ界のビッグイベントが重なる年です。2月にはロシアのソチで冬季オリンピックが開催されます。6月から7月にかけてブラジルでFIFAワールドカップが開催されます。今から日本選手の活躍が楽しみです。ゲームでは勝利を期待されている為、選手の選抜は重要です。

元サッカー日本代表監督が選手選抜の基本条件に次の4つをあげています。(1)個の能力が高いこと。(2)創造力が高いこと。(3)瞬時の判断力に優れていること。(4)組織の一員としての自覚があること。の4つです。サッカーは選手の個人プレーが勝敗を大きく左右するスポーツですが、あくまでもチームゲームです。個人の能力と同じく、チームに於ける自分の役割を正しく理解し、確実に全うできるか否かがポイントだと述べています。

これは私達にも当てはまることです。(1)個の能力が高いことは、営業力、語学力、商品知識、理解力に優れている。(2)創造力が高いことは、ものごとを高いレベルで発想し提案できる。(3)瞬時の判断力に優れているは、状況を的確に把握して結果を予測し適切に対応できる。(4)組織の一員としての自覚は、仕事は組織で動くことを理解している。に結び付きます。いつも好成績を上げる人であっても、それは組織があってこそその結果であるということを実感できなければ、グローバルな活躍は期待できません。

2016年の創立70周年を輝ける年とする為には、世界でマルカキカイグループがビッグゲームにチームプレーでの勝利を積み重ねていく必要があります。今年のキャンペーン・スローガンのキーワードは「新たなステージ」並びに「変革の推進」です。昨年確立した「四極体制」を一層堅固なものに仕上げ、「事業拡大」の軌道に乗せること及び、将来のあるべき姿から、今の自分は何を為すべきかを考えて常に自身を「変革」させることが今年の命題です。

「甲午(きのえ・うま)」の今年もマルカグループにとって、様々な意味で新しい時代の幕開けの年です。マルカグループ全体で「ゲームに勝利する」を数多く積み重ねて、勝利パターンをDNAに深く刻み込む1年にしたいと強く念じます。この1年更に進化すべく全力を尽くして頑張ります。

今月のことば

乾 相談役

○ ブランドの重要性を再認識せよ

食品偽装問題が大きな問題となり、会社のブランドに大きく傷をつけている。ブランドは金銭では評価ができない無形の財産である。ブランドは長い時間を積み重ねて築きあげるが、反面一夜にして失うことも多く、その結果廃業に至る場合もある。企業が事業を継続する基礎力は、ブランドによって得ている信用力の大きさである。日本では100年を超える歴史を持つ企業が世界的に見ても多い。昔から暖簾に傷をつけるなと教えられてきた。わが社に当てはめればブランドと同様の信用を基礎として商売をしている。不良品を納める、納期遅れが発生するなどの信用に傷をつけることはあってはならない。担当者のミスや商品品質の問題は、単にその取引だけにとどまらず、そのユーザーとの取引全てにまで影響が及ぼすケースが多い。海外製品の取り扱いが増加することは時代の趨勢であるが、取り扱うことには十分な吟味が必要である。我々の商売は責任を持つ、つまりブランドと同等の信用を維持することで成り立っている。我々も食品業界のできごとを他山の石として、ブランドの重要性を再認識しなければいけない。

○ 人生は有限、企業は無限

人生は有限であるが、企業は無限である。人生が有限である人間が、無限に企業を維持していくためには、変えてはならないものと、絶えず変えていくべきものがある。守るべきものの第一は信用である。信用は商売の全てに優先する最重要事項である。信用があるからこそ、取引してもらえる。信用が無ければ誰も相手にしてくれない。守るべきものの第二は人材の育成である。企業の担い手は人間である。この人たちが成長しなければ、企業は激しい競争に勝つことはできず、市場からの退場を余儀

なくされる。同時に、次の世代を支える後継者を育てなければならない。より優秀な人材を多く育て、会社の将来を引き継いでもらわなければ、会社の発展は望めない。変えていくべきためには、絶えずイノベーションを繰り返すことである。常に改革して時代の要求に答えていかなければ、事業が時代から取り残されて衰退することになる。変化を先取りできる人、新しい事業を構築できる人を多く育てれば、企業は大きく発展する。企業は成長発展しなければならず、現状維持やジリ貧では人材は決して育たない。企業は永遠に発展していくよう精進すべきである。

○ 無駄金を使うな、活きた金を使え

民間企業である限りは、無駄な経費を常に削減することは経営の基本である。経費の削減を推進することと、消極的になることは意味が違う。コストダウンした結果が、品質が低下したり、対応が悪くなったり、何等効果のない経費を使うことになってはいけない。短期的には出ていくだけであっても、長期的には会社の利益や発展にプラスになる、会社に有形無形の優良資産が残る「活きた金」であれば、積極的に使うべきである。逆に、短期的にも長期的にも出ていくだけで、会社にプラスにならないお金は「死に金」であり、これは削減しなければならない。「死に金」は無くし、「活きた金」を積極的かつ効果的に、使うべきである。使っても使わなくても効果が余り変わらない場合は、殆どが「死に金」である。営業に於いては、利益向上に向け常に努力することも当然強力にやらなければいけない。お金の使い方が会社にとって有益か無駄か、全員がしっかりと判断することが事業を拡大させるための基本である。



		タイ	インドネシア	マレーシア	フィリピン	台湾	広州	備考
GDP成長率 (%)	2013年	3.7%	5.9%	4.6%	6.9%	1.74%	7.6%	推定値
	2014年	4.5%	6.2%	5.1%	6.5%	2.59%	7.3%	予測値
物価上昇率 (%)	2013年	2.3%	7.3%	3.5%	3.2%	0.8%	2.7%	推定値
	2014年	2.8%	6.7%	3.5%	4.5%	1.0%	3.1%	予測値
為替相場 (対米ドル)	13/10/10	B32.12	PR11,800	M\$3.15	P43.150	NT\$29.55	RMB6.140	1\$=97.61円
	13/11/10	B32.12	PR11,385	M\$3.33	P43.200	NT\$29.48	RMB6.0571	1\$=96.89円
	13/12/10	B32.07	PR11,600	M\$3.33	P44.150	NT\$29.64	RMB6.077	1\$=103.36円
	今後の傾向	↘	↘	→	↘	→	↗	
短期金利		2.50%	7.5%	6.25%	0.5708%	4.10%	5.04%	
	今後の傾向	→	→	→	→	→	↗	
失業率		0.70%	5.9%	3.1%	6.5%	4.20%	4.04%	

マルカ駐在員からのコメント

2014年の経済成長率予想は、タイ経済のファンダメンタルズが健全であることから4.8%増に上向くと予想されている。

昨年から製造業を中心としたタイへの進出が続いている状況だが、サービス産業の進出も増加傾向にあり、大手日系の飲食業もチェーン展開を行うなど活発化してきている。

今後、多様で質の高い日本式のサービスがタイの市場へ入り込むチャンスは増えると予想される。

賃金上昇、デモなど問題もあるが、駐在者としては今後も魅力的な投資国であり続けてほしいと願っている。

インドネシアに対する国別の外国直接投資を見ると、昨年日本の投資額は50億ドルに上ると推定されている。

今年は4月の大統領選挙があり日本の投資額は落ちると予想されるが、GDPは昨年の5%台から6%台に戻るとい見通しだ。

特に自動車の販売台数は2012年100万台突破し、昨年は120万台を突破。今年は130万台になるとい予想も聞かれる。

一方インフラ整備の遅れが経済成長の阻害要因となっている為、インフラ整備が今後の更なる成長の鍵となる。

ナジブ・ラザク首相の発表によると、日本はマレーシアにとりトップの投資国となっており、約1,400社がマレーシアにおいて事業を展開している。製造業への投資額はこれまで222億米ドルに上っている。

日本と東南アジア諸国連合(ASEAN)の貿易に関してムスタバ通産相は、年間貿易額を現在の2,600億米ドルから2022年までに5,000億米ドルに拡大する計画だと明らかにした。2015年までに発足が予定されているAEC(ASEAN経済共同体)の設立や各国が投資を促進する取り組みを行っており、達成は可能だとの見解を示した。

外資系企業による投資の動きをみていくと、まず製造業の新規投資・拡張投資の動きが目立つ。2012年以降キャノンやブラザー工業などのプリンターメーカーや、電子機器メーカーである村田製作所などが新規生産を開始している。BPO関連投資が拡大し、ITサービス、金融サービス等を手掛ける企業の新規投資の動きもある。

政府は投資環境の更なる改善を図るため、産業界からの意見聴取を行い、包括的国家産業戦略を策定中である。当面は高成長が維持される見通しである。

2013年当初は約3%のGDPが期待されたものの、輸出の伸び悩みや個人消費の冷え込みが影響し、1%台まで落ち込むことが見込まれている。2014年はGDPの半分を占める輸出、特に40%を占める中国・香港の経済状況が台湾の景気を依然大きく左右する要素になる。

工作機械の分野では2012年に続き今年も輸出が前年比マイナス、しかも10%以上落ち込む見通しで、2014年は円安による日本製工作機械の価格差縮小などが原因で引き続き厳しい経済環境にさらされると予想されている。

2013年度GDP成長率は6月の金融市場の混乱から減速基調をたどり、後半も直すも推定値7.6%と前年度比横ばい、2014年度の予想値は7.3%と見込まれている。

日系自動車業界に限れば、一昨年の影響はほとんど見られなくなったが、なお投資に慎重な企業のみられる反面、凍結や保留となっていた新工場建設を積極的に進める企業も多くあり、ある意味二極化して来ている。

また、環境面ではPM2.5など環境汚染が深刻さを増しており、環境対策の一層のスピードアップが望まれる。

インドネシア企業視察ツアー2013



(MKM社にて)

(スマートコミュニティ 2013 in インドネシア)
マルカインドネシアブース A-2前

ジャカルタ国際見本市の開催に合わせた12月18日(水)～21日(土)の4日間、現在注目されている市場の一つでもあるインドネシア(ジャカルタ)の企業視察ツアーを、岡山・鳥取から8社8名のお客様にご参加頂き開催致しました。

(12月18日)

関西国際空港より約7時間のフライトでスカルノハッタ国際空港(インドネシア)へ到着しました。バスに乗り、ホテルへ向かう途中で夕食(シーフード料理)を済ませ、移動の疲れ及び明日からの企業視察に備え、ホテルでエネルギーを蓄えました。

(12月19日)

1社目は、パvind様(現地企業)を訪問致しました。自動車・二輪のマフラー・燃料タンク・オイルパン・治具等を製造されており、弊社が9.69%出資している会社でもあります。仕事の内容及びインドネシアの現状のお話を伺った後、工場見学させて頂きました。従業員の平均年齢が20代後半ということもあり、非常に活気のある工場でした。

2社目は、ミトラメタル様(現地企業)を訪問し、自動車・二輪のプレーキ部品の製造ラインを見学致しました。工場内は整理整頓されており、日本製の工作機械が多いことにも驚かされました。

3社目は、フタバ産業様(日系)を訪問致しました。ご存知の通りマフラー等の燃料部品を製造されております。会社概要の説明の後、工場を見学させて頂きました。立ち上げ当時、日本とインドネシアのギャップで苦勞したお話やインドネシアの今後の展望等についてお話を伺い、皆さん真剣にメモを取られていました。

フタバ産業様を後にし、インドネシア名物?の渋滞に巻き込まれながらもホテルに到着し部屋でゆっくりする間もなく、懇親会の時間となりました。懇親会では、釜江会長も合流し皆様とご挨拶させて頂いた後、参加ユーザー様へお礼を申し上げます。

(12月20日)

企業視察ラストとなる4社目は、三菱ふそう様(日系)を訪問致しました。トラックのエンジン工場及びプレス工場を見学させて頂きました。熱心な質疑応答に、インドネシアの市場にみなさん関心を持たれていると強く感じました。

午後からジャカルタ国際見本市会場へ移動し、工作機械等の展示会に参加しました。この展示会は、日本とインドネシア国交樹立55周年を記念して開催されたもので弊社もブースを構え、7社のメーカー様の機械を展示させて頂きました。福田康夫元首相をはじめ日本の関係者の方も多く参加されていました。

夕食は、インドネシアに来て初めてのインドネシア料理で、お口に合ったかどうかはわかりませんが、ワイワイ言いながら楽しい時間を過ごさせて頂きました。

(12月21日)

最終日は観光とゴルフ組に分かれ、観光組はジャカルタ市内のモスク、独立記念塔、ショッピングを堪能致しました。夕方、ゴルフ組と合流し最後は日本食で打ち上げパーティーをしてインドネシア最後の夜を楽しみました。

最後になりましたが、年末のお忙しい中、この企業視察ツアーにご参加頂きました企業様ならびに、工場見学させて頂きました訪問先各社様には厚く御礼申し上げます。

(岡山支店/大戸 康平)

マルカベトナム現地法人化



前身の駐在員事務所を2002年に設立してから紆余曲折の11年が経ち、ようやく現地法人を設立することができました。これまでベトナムは、国内産業・技術力の発展が遅れ、日系企業の進出も他国に遅れをとっていましたが、この数年の発展は目覚しく、絶好の機会を逃すまいと現地法人・マルカベトナム社の設立を決めました。

本社はハノイ市・タンロン工業団地内にあります。空港とハノイ市街地の中間地点であり、約90社ある工業団地内の日系企業様まで車で5分という絶好の立地です。また、南の大都市・ホーチミン、近年発展が著しいハイフォン市、ダナン市にも納入実績があり、弊社社員が南北に長いベトナムを飛び回っています。

新規の機械設備、部品は今までどおり販売してい

きますが、マルカベトナム社が現在力を入れているのは、サービス部門の立ち上げです。半年前からサービスマンを社員として採用し、機械を買っていただいたお客様に周知されるようにと、無償で仕事をさせていただいたり、マルカキカイが11年前から納入してきた機械の再点検をして、準備を進めてまいりました。

今後は、機械メーカー各社の教育訓練に参加したり、マルカグループ海外拠点の力も借りて、お客様から信頼していただけるようなサービスの充実を計っていきたいと思います。納入据付、移設、修理、定期点検など、機械設備に関することは何でも受け付めます。

バイク、自動車が増え、インフラ整備が進み、経済発展著しいベトナムにおいて、生まれたばかりのマルカベトナム社はこれからも成長し続けたいと思います。

マルカベトナム社 富田 昌孝

名 称	MARUKA VIETNAM CO.,LTD
設 立	2013年9月
営業開始	2013年12月
資 本 金	400,000USD
従 業 員	7名(うち日本人1名)
住 所	R.202, 02nd Floor, Techno Center Building, ThangLong Industrial Park, Dong Anh District, Ha Noi City TEL +84-4-3955-0164 FAX +84-4-3955-0165